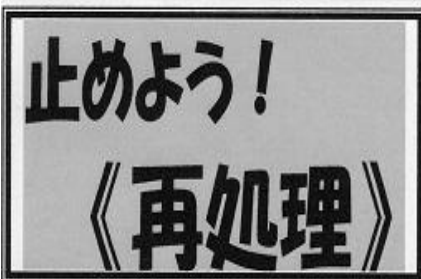


**三陸の海を放射能から守る**  
**岩手の会** (略称) **三陸の海・岩手の会**  
 郵便振替 02240-5-102650  
 ホームページ 《再処理/岩手の環境》  
<http://sanriku.my.coocan.jp/>  
 《本紙の全バックナンバー掲載》



《**天恵の海**》

2018(平成 30)年  
 1月16日  
 第185号  
 編集事務局 S.Oshida  
 TEL・FAX 019-623-1636

**六ヶ所再処理工場**  
**竣工予定 3年延期**

**規制委員会は審査を棚あげ、再報告を命令**

(着工以降)  
**23回目**

**度重なるトラブル 虚偽報告の事例も**

日本原燃は十二月二二日の定例社長記者会見で六ヶ所再処理工場の竣工時期を「三年程度延期し二〇二二年度上期」に変更すると公表しました。再処理工場の竣工時期延期はアクティブ試験開始以降十五回目(着工以降二三回目)です。ほとんど完成の見通しのない工事に国民の税や電気代から巨費を使い無理に続けている姿がますます明瞭になり始めました。

工藤健二社長は延期の理由として原子力規制委員会の指摘した重大事故対処のための「蒸気凝縮器の設置とその影響の評価」や「緊急時対策所の設置工事」をあげました。

**検査せずに「検査済み」と報告**

しかし事実は、二〇一六年十二月にウラン濃縮工場の廃棄物に関わる幹部職員による虚偽報告があり、原子力規制委員会より指導を受けております。加えて二〇一七年八月、非常用電源建屋へ、ケーブル等配管から雨水が流入し溜まっていた。調査したところ、ケーブルピットが雨水で満杯になっており、同箇所を検査せず

に「検査済み」との虚偽報告が長年なされてきたことが発覚しました。

**工場内六〇万箇所の再検査**

度重なる不祥事に怒った規制委員会は、新規制基準申請の審査を棚上げにし、再報告の命令を下しました。そのため原燃は、工場内六十万箇所の検査等を実施せざるを得なくなり、その対応に追われアクティブ試験終了の目途が立たなくなりました。したがって今回の稼働延長は過去最長の三年もの延期になったのです。巨額な浪費は日本の経済のくびきになり始めました。二〇一八年こそ、国民の意思を結集し再処理工場撤退・廃止の選択を実現させましょう。

**二二年前  
 アクティブ試験進行!**

二〇〇六年三月三十一日、住民の反対を押し切つて六ヶ所再処理工場のアクティブ試験が強行され、使用済み核燃料のせん断溶解がはじまりました。放射能廃液が工場沖合い約3キロ水深四四mの放出口から海に流れ始め、特にもトリチウムは除去の装置もないまま全量が捨て

**連日 トリチウムなどが放出された**

図1 トリチウム六ヶ所沖合約3kmへの放出事例 (2007年)

4月	排水量 m <sup>3</sup>	トリチウム放出量Bq	放出濃度Bq/ℓ
6日	425.5	51億	1万2000
7日	377.6	6兆3000億	1700万
14日	587.1	7兆4000億	1300万

日本原燃・青森県報告書から

**この向こうに放出口が...**



**尾駱沼** 海とつながっているため 海水が入り出す。

図1は、連日放射能廃液が流されていた二〇〇七年四月の六ヶ所再処理工場からのトリチウム放出のデータです。この廃液が環境に悪影響を与えヒラメから自然界の一四倍の濃度のトリチウムが測定され、尾駱沼の藻類からヨウ素129が測定されました。

られました。使用済み核燃料のせん断が終了したのは二〇〇八年一〇月ですが、この二年半にせん断された使用済み核燃料は一七〇二体(ウラン換算で四二五ト)、総計二二七九兆ベクレルものトリチウム廃液が流されました。特に二〇〇七年が放出回数が多く、三十四日おきに原発の濃度規制値の数百倍から最高二八〇〇倍ものトリチウムが流されました。

図2 モニタリング結果(トリチウム) 青森県・日本原燃報告書から (2007年)

4月	検査機関	検査対象	場所	放出濃度Bq/l	塩分(千分比)
10日	日本原燃	海水	放出口付近と2箇所	ND	35
11日	青森県	海水	放出口付近と2箇所	ND	34
17日	日本原燃	湖沼水	尾駁沼1	2	6.0
			尾駁沼2	3	13
18日	青森県	湖沼水	尾駁沼1箇所	ND	4

# 海水トリチウム濃度は 本当に検出限界値以下だったのか?

尾駁沼。向こう岸が再処理工場。カヌーで接近し撮影。(二〇〇七年九月)



## 日本原燃・青森県の モニタリング結果

上の図2は、図1と同様の、日本原燃、青森県のモニタリング結果です。図1の超高濃度トリチウムの海洋放出量に比して、図2では海水のトリチウム濃度が全てND(検出限界値2Bq/l以下)になっており不自然です。

**◇放出口付近の海水がND?**

原燃データは沖合いの放出口付近とその北5kmと南5km、青森県データは放出口付近と北20km南20kmで採取したといえます。しかしトリチウムが検出されないというのは不思議です。二〇〇六年度から二〇〇八年度にかけて原燃・青森県の海水調査は五〇〇六〇回行われましたが、全てND(検

出限界値以下)でした。ところが北に25km離れた離れた東北電力東通原発沖で三回も3〜4ベクレル/lが検出されています。環境科学研究所でも尾駁沼で六回検出しています。

## ◇尾駁沼水「塩分1.3%で3Bq/l」

尾駁沼は放出口の方向に開いている汽水湖であり、干満の差によってかなりの海水が出入りします。日本原燃が2地点、青森県が1地点を調査していますが、青森県がND、日本原燃が『2Bq/l』と『3Bq/l』と報告しています。「尾駁沼2」地点が図2一七日のように『塩分濃度1.3%で3Bq/l』なら、海域から流入した海水のトリチウム濃度は『6〜7Bq/l』と逆算出来ます。(海水の塩分濃度は3.5%くらい)。原燃・青森県が海域で一度もトリチウムを検出出来ないこととはあり得ないことです。データの操作が疑われます。七日には六兆三〇〇〇億ベクレルものトリチウムが放出されているのです。

## 高レベル放射性廃液 安心出来ない

この再処理工場竣工三年延期で安心して良いものだろうか? もちろん、工事を強行されるよりは良い。しかし、

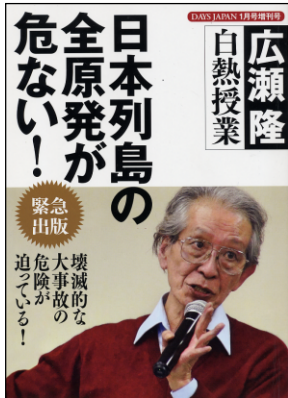
再処理工場は、稼働しなくとも危険な工場であることを忘れてはならない。本物の放射性物質を扱わなかった二〇〇五年以前であればともかく、放射能を閉じ込めていた「使用済み核燃料」をせん断溶解し廃液を作ってしまったのです。二〇〇六年以降は特に危険になったのです。

**「ガラス固化体」にする技術がない!**

実は「高レベル放射性廃液」はガラス固化体にして安全化するはずだったので。しかし、「ガラス溶融炉」が、白金族沈積により電気の流れが短絡し温度が上がらないなどのトラブル続きです。危険な高レベル廃液が多量に保管されており、技術者や作業員が必死になって安全確保をしているという状況です。とにかく再処理撤退・ガラス固化が求められます。

白熱授業 広瀬隆 著  
日本列島の全原発が危ない!  
DAYS JAPAN 増刊号 2018.1  
定価 2322円(本体+税)

# 本



で報じました。今回のこの「DAYS JAPAN」の増刊号は、当日の講演内容にさらに新事実も加え、掲載の図版も分かりやすい。

私達、岩手で脱原発。六ヶ所再処理反対を闘っている者にとってこの本は、多くの人々に読んで戴きたい。それはこの本が「再処理工場の危険性」についてしっかりと真正面から論じているからです。地震列島に原発は危険極まりない。さらに再処理工場は「放射性高レベル廃液」を作ってしまったのにガラス固化が出来ない現状です。日本列島は紛れもなく具体的に危険なのです。(尚)

東海・六ヶ所再処理工場が陥っている隘路。全日本人が総力をあげて解決するしかない。

け付けて、取材しこの『天恵の海』第一七六・二七七号

